

## 降誕節第2主日礼拝説教「起きて、行きなさい」予稿

日本基督教団石神井教会 2017年1月1日

### 【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 1章3～11節

<sup>3</sup>わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。<sup>4</sup>神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。<sup>5</sup>キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。<sup>6</sup>わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。<sup>7</sup>あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。<sup>8</sup>兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。<sup>9</sup>わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。<sup>10</sup>神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。<sup>11</sup>あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。

### 【福音書日課】マタイによる福音書 2章13～23節

<sup>13</sup>占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」<sup>14</sup>ヨセフは起きて、夜のうち、幼子とその母を連れてエジプトへ去り、<sup>15</sup>ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>16</sup>きて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。<sup>17</sup>こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

<sup>18</sup>「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないから。」

<sup>19</sup>ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、<sup>20</sup>言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」<sup>21</sup>そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。<sup>22</sup>しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、<sup>23</sup>ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

## クリスマスの幼子を守れ！

福音書の御言葉にちなんで、あまり歌われないかもしれない讃美歌を、説教に先立って一緒に歌いました。『讃美歌 21』272 番「おやすみなさい」。子守歌です。主イエスの母マリアが、その胸に抱く幼子をあやしている。ぐずって泣く赤子に、「こわがらないで。何も心配はいらない」と語りかけながら、静かに、眠るのを待つ子守歌。それが、讃美歌として教会で歌われるようになったものです。礼拝で皆さんと一緒に歌う讃美歌としては選びにくい一曲です。しかし、今日の礼拝では、ぜひ皆さんと一緒に歌いたいと思いました。

このクリスマスに、多くの教会で洗礼式が執り行われたことでしょうか。わたしたちの教会では執り行いませんでしたが、多くの教会で、洗礼を受けられたキリスト者が新しく生まれたのです。もっとも、近年はクリスマスよりもイースターに洗礼式を執り行うことのほうが多くなってきているようです。いずれにしても、新しい年を迎え、わたしたちは、何よりも、わたしたちの教会の交わりの中で一人でも多くの洗礼式が執り行われることを願わないではられません。

洗礼を受けることは、信仰生活のゴールではなく、スタートです。洗礼を受けたとき、たとえその人が何歳であろうと、キリスト者としては0歳です。もちろん、わたしたちは、幼児洗礼でなければ、洗礼を受けるに際して、一つの決断をし、自分の口で信仰の告白をいたします。そうであっても、洗礼を受けるに際して、その人の決断や自覚的な信仰が決定的なわけではありません。何よりも重要なことは、その人をキリスト者として誕生させようという、神のご決断です。神のご決断を信じて、そのキリスト者を、新しく誕生する神の家族の一員として受け入れ、迎え入れようという、教会の自覚です。

一人の子の誕生は命を与えてくださる神のご決断から始まります。新しい命は一人のマリア、母親の胎に宿されます。まずは、母親自身が宿った新しい命を受け入れなければいけません。そして、新しい命を宿した母親には、自分を受け入れ迎え入れてくれる家族、マリアを受け入れたヨセフが、必要です。いよいよ胎から生まれ出てきたときからは、その家族全体で誕生してきた子の命を守り育てという、神から委ねられた責任を担い始めるのです。

クリスマスを祝いました。クリスマスに、御子キリストの誕生を憶え、祝いました。そのクリスマスに、わたしたちは、ただ、御子キリストの誕生を憶えただけではありません。洗礼によって新しい命を授かるキリスト者の誕生という出来事をも記念したのです。キリスト者は、教会というキリストの家族、《神の家族》のうちに誕生します。洗礼によって生まれるキリスト者を、教会は、神から託されるのです。ちょうど、二千年前に幼子イエスを託された《聖家族》、ヨセフとマリアのように、教会は、洗礼によって生まれるキリスト者を託されます。わたしたちは、その子らを連れて、御言葉の指し示す道を進むのです。赤子のようにぐずって泣くときにも、わたしたちは、先に生まれさせられた兄として姉として、「こわがらないで。何も心配はいらない」と語りかけながら、どこまでも一緒に連れて行くのです。

## エジプトに逃れて

キリスト者が一人で歩いて行くには厳しい現実があるのです。幼子イエスの命を狙ったヘロデ大王のような、キリスト者としての新しい命を狙うものが、わたしたちの現実の中には数限りなくある。考えてみてください。わたしたちの中に、今日まで自分の信仰心や信念で信仰生活を保ってきた、と胸を張って言える者が一人でもいるでしょうか。わたしたちも皆、洗礼を受けたときから、多くの教会の先達に守り助けられて、キリストに従う道を歩み続けてきたのです。ヨセフは、主の天使にヘロデ大王の存在を示されて、そこから逃れる道を進みました。わたしたちも、キリスト者としての命、信仰の命を奪い取ろうとする諸々を見抜き、そこから逃れる道を共に進まなければいけない。

クリスマスの物語の終わり。占星術の学者たちの訪問を受けた幼子イエスとヨセフ、マリアら聖家族は、エジプトへの逃避行をいたしました。幼子の命を狙っているというヘロデ大王から逃れるためです。

ヘロデ大王は、残忍な暴君として知られていました。政敵ばかりでなく、愛する妻も自分の息子らも、疑心暗鬼に駆られた末に殺してしまったと言われます。そのヘロデ大王が、占星術の学者たちや律法学者たちの語るベツレヘムに生まれたという幼子の存在を不安に思い、その命を狙ったのです。その幼子が特定できないと分かったときには、**ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた**のでした。歴史的事実は分かりませんが、聖書学者らは、このときに殺された幼児はせいぜい二十~三十人であったろうと言います。ヘロデの行った残忍な虐殺事件の中では、記録にも残らないような小さな事件であったかもしれません。けれども、そうであっても、このときの虐殺事件の背後で、どれだけの母親たちが悲嘆に暮れたことでしょうか。どれだけの家族が怒りと恐れを抱いたことでしょうか。そのような中で、ヨセフとマリアの聖家族は、幼子イエスだけは、天使のお告げによって難を逃れたというのです。

このような降誕物語を読むたびに、わたしは、この事件のことを、主イエスは両親から聴かされて育たれたのではないかと想像するのです。「あなたが生まれたとき、実は、こういうことがあって…」と、両親は息子イエスに語り聴かせたのではないのでしょうか。それを聴かれた主イエスは、何を感じられたのでしょうか。きっと、「なぜ、そのような事件の中で自分は助かったのか」と、深く自問されたのではないのでしょうか。両親を通して守りの御手を伸べられた主なる神の導きを、はっきりと知るようになられたのではないのでしょうか。幼児虐殺というようなことの起こる暗い現実の中で、命与えられ、命保たれて、生かされていることの意味を、明らかに悟るようになられたのではないのでしょうか。それで、この物語を弟子たちに語られた、ということがあったのかもしれないと想像するのです。

多くの人が信仰に触れ、教会に触れ、キリストの命の萌芽をさえ与えられながら、信仰を見失い、教会から離れ、キリストの命を失ってしまいます。今も、《ヘロデ大王》のような何者かが奪い取ってしまう信仰の命は、少なくないのです。そのような中で、なお、キリスト者として生かされ、洗礼を受けた者として命保

たれ、生かされ続けているわたしたちが、ここに集っている。なぜでしょうか。失われた命を回復させるためではないでしょうか。主イエスが、十字架に至る生涯をかけて、失われたイスラエルの民を救う御業に仕えられたように、わたしたちも皆、失われた信仰の命を回復してくださる神の御業に仕えるために、今、キリスト者として生かされている。そういうことなのではないでしょうか。

## ヘロデの怒りから離れて

ヘロデ大王。ユダヤの王です。権力者です。残虐な暴君でした。それにしても、幼子一人のことで不安に思い、怒りにまかせて一帯の幼子を一人残らず殺してしまうというのは、乱暴すぎます。あのヘロデだからそういうこともあつたらうと、誰もが言います。しかし別の見方をするならば、ヘロデは王として当然のことをしたのです。ヘロデの怒りは、あの占星術の学者たちの裏切りに対する怒りでした。ヘロデは、学者たちを送り出すときに、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」(2:8)と命じたのです。学者たちも「はい」と言って出発したのでしょうか。ところが、学者たちはヘロデとの約束を一方向的に破りました。その裏切りに対してヘロデは怒った。大いに怒った。だまされ、裏切られたことに対して、決して怒ることなく、静かに寛容に見過ごしにできる人が、どれだけいるでしょう。そうであれば、ヘロデの怒り自体を、だれも「けしからん」とは言えないでしょう。しかし、その怒りは、幼児虐殺という、とんでもないことへと発展してしまいました。弱く小さな命を根こそぎ奪い取ってしまったのです。

このヘロデの怒りを、わたしたちも皆、心の中に持っているのではないのでしょうか。その同じ怒りから、わたしたちは、離れられないのではないのでしょうか。過ぎた年を振り返って、わたしたちは皆、どれほど、このヘロデの怒りと同じ怒りを発して、周囲の者の信仰の命を、芽生え始めたばかりの小さな命を、蔑ろにしてきたことか。

しかし、わたしたちは、ヘロデの怒りから逃れる道を、すでに与えられているのです。御子キリストを幼子として託されたヨセフが、主の天使の告げる言葉に従って、その子と母親を守る歩みへと進み出ることができたように、わたしたちにも、御子キリストが幼子として託されている。洗礼を受けたキリスト者として、あるいはいずれ洗礼を受けるべき者として、託されている。この人たちを託され、守る責任を負う者として、わたしたちは主の天使の告げる言葉を聴くのです。自分で行こうと思うところに行くのではなく、「起きて、行きなさい」と告げられるところに進み行くのです。そこにだけ、ヘロデの怒りから逃れる道がある。わたしたちの怒りが周囲の命を蔑ろにしてしまうことのない道がある。わたしたち自身と、わたしたちの周囲の者にとっての、幸いの道がある。

幼子イエスと共に、クリスマスから始まる歩みを始めました。御子を宿した信仰の家族と、互いに支え助け合いながら歩みます。主イエスの導いてくださる幸いの道、十字架と復活にたる道は、すでに備えられています。